大手、再浮上へ大型投資

高品質、用途拡大追い風

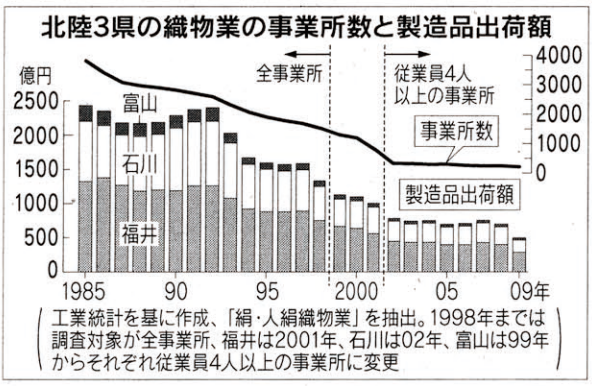
北陸の織物各社が反転攻勢に出ようとしている。再浮上の鍵を握るのは人の髪の毛より細い「超極細繊維」。スポーツ衣料など向けに用途が急速に広がっており、100台規模の織機増設に踏み切る企業があるなど大手各社は大型投資に踏み切る。アジア勢の攻勢に長年苦しんできたが、海外企業が技術面でまだ対応できない薄地の織物に基幹産業復権の期待がかかっている。

北陸の織物……超極細繊維にかける（上）

織物大手の丸井織物（石川県中能登町、宮本徹社長）は12月、総額9億円を投じグループ会社を含めた織機を1割増やす。本社に超極細繊維の織機173台を導入し、最も細くて7デニールの糸で生地を量産する。同社にとって過去5年以上なかった大型投資だ。

超極細繊維は太さを表す単位「デニール」が20デニール以下で、東レの愛知工場（名古屋市）と東洋紡の敦賀事業所（福井県敦賀市）が生産している。

丸井織物はグループで千台の織機を保有する国内大手だ（石川県中能登町の本社）



工業統計を基に作成、「絹・人絹織物業」を抽出。1998年までは調査対象が全事業所、福井は2001年、石川は02年、富山は99年からそれぞれ従業員4人以上の事業所に変更

不良品率低く

中古織機147台は衣料用裏地などを生産するため、グループ企業の良川サイジング（同、山本隆士社長）に移す。良川サイジングは経営破綻した中能登町内の織物工場をこのほど買収した。本社と織機を集約し、工場棟の延べ床面積は約2倍に広がる。30人を新たに雇用し、研修を始めた。

織物生産のカジレーネ（石川県かほく市、梶政隆社長）は8月末までに工場棟を増設し、織機を2割増やす。総投資額は5億～10億円。新たに開発した機種も導入する。

同社は薄地織物の市場拡大を見越し、約8年前から糸の太さが50デニール未満の織物の生産に特化してきたが、今後は7～20デニールの糸を使った織物を増産できるようにする。

超極細繊維を使った薄手で密度の高い織物の用途は急拡大中。スイングしても服がこすれた音がしないゴルフウエア、汗でべとつかない速乾性ユニホーム、保温性と防水性、透湿性を兼ね備えたスポーツウエアなどだ。

ただ糸が細いために織りにくく不良品が出やすい。不良品が出るたびに織機を止めれば稼働率が下がり、点検や修理の要員が多く必要になる。

そこで、丸井織物とカジグループは生産改善に取り組み、不良品の発生率を大幅に引き下げてきた。丸井織物は豊田自動織機と協力し、織機を自社専用に改良した。

カジレーネは産業資材として国内シェア5割超を握る複写機用リボンで40デニールの細い糸を織る技術を応用し、20デニール未満の太さにも対応できるように進化させた。

海外勢振り切る

カジレーネの梶社長は、中国本土の人件費は国内の10分の1だが、不良品率は約20%と国内の1%より高いと分析する。「技術面で差がある間に織機を増やし、アジア勢の追撃を振り切りたい」と意気込んでいる。

海外の織物メーカーの規模は桁違いだ。台湾の織物メーカー「フォルモサタフタ」の織機保有台数は国内大手の丸井織物の8倍に達する。

アジアを中心とする海外は不良品率が高い段階だが、技術的な進歩も進むと予想されている。

丸井織物の宮本社長は「いずれは日本に追いつき、価格競争に突入する時期が来る」と予想する。それまでに日本製の織物の品質の高さを世界中で浸透させ、国内外のアパレルとの取引量を今まで以上に増やす戦略だ。

安価な輸入品に押されてきた北陸の織物産業。超極細繊維は期待の星だが、アジアの追撃を前に競争は新たな局面に入ろうとしている。

▼デニール　繊維1本の重さの単位。9000メートルの糸の重さが1グラムのときに1デニールと表す。軽いほど繊維が細くなるため、糸の太さを示すために使う。長繊維の織物業界では一般的に20デニール以下を「超極細繊維」と呼ぶ。国際規格として1万メートルの重さが1グラムのときに1デシテックス（dtx）とする測り方もあるが、国内の繊維業界ではデニールが定着している。

海外に押され休廃業相次ぐ

北陸の繊維産業は大まかに「染色業」「織物業」「編み物業」「糸加工業」の4業種に分かれる。特に合成繊維の織物生産量は福井、石川の2県で全国の6割を占める。ただ、近年は織物から縫製までの海外生産が加速し、国内では休廃業が相次いでいる。

事業所36%、出荷額37%減

3県の織物業の事業所数は1960年代後半から70年代前半がピークだった。最も古いデータが残る石川県の事業所数は69年の3307が最多で製造品出荷額は577億円に達した。

3県とも調査対象が従業員4人以上の事業所となった2002年と比べ、09年の事業所数は36%減の2111、製造品出荷額は37%減の496億円に縮小。じり貧傾向が続いている。